

学業的援助要請における学業的・社会的有能感と教師の働きかけの交互作用効果

○後藤綾文(岐阜聖徳学園大学)

赤松大輔(名古屋大学大学院)

キーワード: 援助要請, 教師の働きかけ, 有能感

問題と目的

学業場面において課題解決のために質問を行うおよび援助を求めることは学業的援助要請と言われ、自己調整学習の一つとしても扱われている(Schunk & Zimmerman, 1994)。学業的援助要請には自律的援助要請と依存的援助要請があり、それぞれ学業的有能感や社会的有能感との関連がこれまで指摘されてきた。学業面および対人面に関して自分が有能であると評価する者は、より自律的な援助要請を行うことが示されている(Newman, 2000; Patrick, Hicks, & Ryan, 1997)。一方、社会的有能感が高い場合には依存的援助要請と関連するという結果も見出されている(野崎, 2003)。近年では、上記のような学業的援助要請と学業的効力感や有能感との関連には社会的な対人場面での能力への志向性を包含していることも示唆されている(Ryan & Shim, 2006, 2008)。

本研究では、学業的有能感と社会的有能感の相互の関連をふまえたうえで、援助要請に及ぼす影響を検討する。異なる領域の有能感が個人内でどのように援助要請に関連するのかは、これまでほとんど検討されていない。さらに、授業などで教師が生徒たちに援助要請を行うように促すことが、その影響を調整する可能性も検討する。

方 法

調査時期

2020年2月に調査を行った。

調査協力者

東海地方の中学校に在籍する中学生 1, 2 年生 280 名(男子 133, 女子 144 名, 不明 3 名)を対象とした。

質問紙

学業的援助要請 同じ学級の生徒たちへの援助要請について、岡田他(2012)の学業的援助要請尺度 6 項目を用いて尋ねた。

学業的・社会的有能感 鈴木(2011)の学業的有能感尺度、桜井(1992)の社会的コンピテンス尺度をもとに中学生に適した表現に修正し、それぞれ 6 項目、7 項目を作成した。

教師の働きかけ 後藤・中谷(2018)の生徒同士の援助要請を促す教師の働きかけ尺度 15 項目を用いた。

結果と考察

自律的援助要請を基準変数とし、説明変数として Step1 に性別を、Step2 に学業的有能感と社会的有能感、教師の働きかけの主効果項を、Step3 に一次の交互作用項、Step4 に二次の交互作用項、Step5 に三次の交互作用項を投入する階層的重帰帰分析を行った。その結果、学業的有能感と社会的有能感の主効果、学業的有能感と社会的有能感および学業的有能感と教師の働きかけの一次の交互作用が有意であった。単純傾斜分析の結果、学業的有能感が高い場合においてのみ、社会的有能感と自律的援助要請に正の関連が示された($\beta = .33, p < .001$)。また、教師の働きかけが低い場合においてのみ、教師の働きかけと自律的援助要請に正の関連が示された($\beta = .40, p < .001$)。さらに、性別と社会的有能感と教師の働きかけの二次の交互作用が有意となった。単純傾斜分析の結果、男子においては教師の働きかけが低い場合、女子においては教師の働きかけが高い場合においてのみ、社会的有能感と自律的援助要請の正の関連が示された($\beta = .40, p < .05, \beta = .30, p < .05$)

(Figure1)。同様に、依存的援助要請を基準変数とした分析の結果、学業的有能感の主効果、学業的有能感と社会的有能感の一次の交互作用が有意であった。単純傾斜分析の結果、学業的有能感が低い者において、社会的有能感と依存的援助要請の正の関連が示された($\beta = -.19, p < .05$)。

本研究の結果より、自律的な援助要請には学業的有能感だけでなく社会的有能感も同時に高いことが必要であると考えられる。さらに、特に学業的有能感の低い生徒、社会的有能感の低い男子生徒への支援として、教師が生徒同士の援助要請を促すことが有効であることが示唆された。

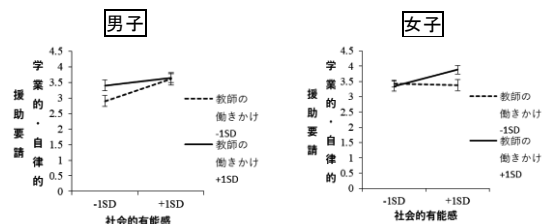


Figure 1 自律的学業的援助要請に対する交互作用効果